

ユニバーサルデザインを意識した  
ものづくりを目指す

研究室はアットホームな雰囲気。  
「学生とは親子のような感覚です」（繁成教授）

繁成剛研究室では、有志学生により、誰でも使える道具づくり活動が行われている。

きっかけは、繁成教授の講義「道具の歴史」。毎回提出してもらう出席カードの感想欄に「授業で紹介された道具をつくってみたい」という学生からのメッセージがあった。それに目を留めた繁成教授の呼びかけに、有志が集まり、毎週月曜夕方5時から朝霞キャンパスの研究室で活動している。

主な活動はユニバーサルデザインを根底に、日常生活に関わる様々な道具を作成することだ。例えば、厚くて強い三層強化ダンボールを使用した椅子。「シートが安い、軽い、組み立て式でスペースをとらない、処分が容易であるなど、様々な利点がある。また、木を使った視覚障がい者用のパズル教材「組み木」など、これまで繁成教授が聞いてきた多くの利用者の声を活かし、その要望に応えられるような道具を開発・作成する。

7月には、障がいを持つ子どもとその家族のための情報を一堂に集めた福祉機器展示会「ミブロキッズフェア2007」に参加した。このイベントでは、総合デザイン『の授業で作成された「ピタゴラ装置」とよばれる遊具を展示。メンバーは、東洋大ブスの受付、装置の説明などを担当した。ものづくりのためには、利用者の生の声を聞く事がとても大切だと気付かされたという。

「子どももよって障がいの度合いが違ってくるので確認できた。使う人とユニバーシオンが取れてよかった（世古綾さん・人間環境デザイン学科1年）子どもは好き嫌いが激しいけれど、自分に興味がある物には本当に夢中になるとわかった」（三木佳緒里さん・同1年）など、充実した時間を体験したようだ。

「自らデザインしたものを喜んでもらえる感覚を知ってもらいたい」と語る繁成教授の、学生に対するまなざしは温かい。ユニバーサルの視点が身についた人を育て、福祉の分野で活躍してもらいたいですね。



ミブロキッズフェアで展示されたピタゴラ装置。  
子ども達には特に好評を得た。

適正価格でお買い物して、  
自立支援の国際貢献を！

フェアトレード商品を手に。  
左から：中尾乃絵さん(2年)、子島先生、石橋明子さん(3年)、  
山本路子さん(2年)

フェアトレードとはその名の通り、「公正な貿易」のこと。発展途上国で生産された商品を、その商品に見合った適正価格で購入することで、弱い立場にある生産者を支援する。有機栽培のコーヒーやドライフルーツ、刺繍工芸などが主な商品。子島進准教授のゼミで、「フェアトレードと地域文化」を取り上げて3年になるが、実際に販売まで行っている点がユニークだ。石橋明子さん(国際地域学科3年)、林大輔さん(同)、大塚瑠依さん(同)は、フェアトレード団体とのやり取り、商品の仕入れ、ディスプレイやチラシ制作から、会計、ボランティアの手配と事前研修、記者会見に至るまでを取り仕切った。3人であれこれと兼任。ゼミだけでは追いつかず、日曜日も集まりました(石橋さん)。

昨年引き続き、今年8月、5日間にわたり地元館林の大型ショッピングモールにて、総勢20名で販売を行った。ボランティアとして参加した学生達は、昨年参加した友達と一緒に参加した。楽しい経験だった(山本さん)。「お客さんからは、商品の購入で生産者の手元に幾ら入るか、といった質問も。生産者の暮らしを学び、理解が深まった(中尾さん)と語る。販売にあたっては、商品の素材から生産者の暮らしぶり、地域の環境まで幅広い知識が求められる。

今年、4つのフェアトレード団体から商品の委託を受けた。その仕組みは、販売した商品の定価の8割と、残った商品を団体に送り返すというもの。残り2割が販売の諸経費に充てられるため、資金のない学生にも取り組める。地域の人々の厚意にも支えられ、2年間の売り上げの累計は100万円を超えた。来年は、フィリピンの生産者から直接商品を買付け、販売する計画もある。

子島先生は学生たちへの思いを次のように語った。「国際協力と地域の活性化に貢献する人間づくりが目的。フェアトレードは、一般企業に就職しても、無理なく楽しみながらできることのひとつ。卒業後も、社会貢献を続けてほしい。」



今年行われた販売の様子は、新聞やテレビ・ラジオなど多くのメディアに取り上げられた。